『平家物語』の対人配慮表現 □「断り」表現を中心に□

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>高山 善行</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>国語国文学</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>2009-03-15</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10098/2163">http://hdl.handle.net/10098/2163</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
『平家物語』の対人配慮表現
——「断り」表現を中心に——

高山善行

1. はじめに
本稿では、「平家物語」の「断り」表現を通して、中世における対人配慮表現について考えてみたい。対人配慮表現の歴史的研究は日本語史研究の分野では新しいテーマであり、時代ごとの基礎的記述を進めていく段階である。今回は中世語において、現代語の対人配慮表現の萌芽を探ってみようと思う。

ここで、本論文の構成を概略述べておく。2. では本研究の方法・資料について述べる。3. で「断り表現」の実態を観察する。4. では対人配慮の萌芽的な表現を取り上げ、5. で対人配慮と不可分の関係にある事記物の規範意識について述べる。6. はまとめである。

2. 方法・資料
本稿は、（依頼に対して）「断る」という言語行動を取り上げ、その中に見られる対人配慮表現について記述するものである。まず、本稿における「依頼」「断り」の定義を述べておく。

「依頼」は、《命令》《お願い》を含む幅広い範囲を指す用語として用いる。そもそも「依頼」は近代的な概念であり、古典語とはじきにくい面もあるが、代わる用語が見つからないので、これを作ることになる。「断り」の用語については、難しいところがある。上世紀中世では、現代語の「お断りします」「出まません」のような定型的な表現がないため、表現を手がかりに定型することが難しい。本稿は、依頼された内容が定型されない場合を「断り」とみなす。つまり、行為の「実行—非実行」という基準を設けるわけである。以下、依頼する人を「依頼主」、依頼を受ける人を「受け手」と呼ぶことにする。

本稿では、「依頼する」「断る」という二つの言語行動を研究対象とするが、「断り」に重点を置く。これは、「断り」の方が対人配慮が明確に現れるという見通しにもとづくものである。

調査資料としては、「平家物語」を用いる。用例収集は、市古貞次校注・訳『新編日本古典文学全集 平家物語①②』（小学館）を用いた。以下、挙例、現代語訳はすべて同書による。
3. 「断り」表現の実態

3.1 観察の対象
調査の結果、『平家物語』で「依頼—断り」場面が58例見られた。以下では、それらを対象として、記述分析を行うことにする。本稿で扱うのは次のような例である。

(1) (義経)「とく／仕れ」と言ひければ、水手揃取申しけるば、(水手揃取)「此風はおひ手にて懷へども、普通に過ぎたる風で候。奥はさぞふいて候らん。争でか仕り候べき」2-342
(「さきと略を出せ」と言わつので、船頭・水夫が申しすは、「この風は追い風ですけれど、普通以上の疾風です。沖はさぞかし吹いております。どうして船を出せましょう。」)

これは、義経が強風の中、船頭たちに呪して船を出させようとする場面である。義経の依頼に対して、水手揃取が断っている。波線部が依頼表現、実線部が断り表現である。用例末尾の数字は巻数・頁数を表す（以下同じ）。

3.2 「断り」のタイプ
実際の用例を観察してみると、「断り」には様々なタイプが見られる。以下、それらを挙げてみよう。

【延期タイプ】
(2) (武士)「西八条へ召さらざるを。きっと参れ」といひければ、(西光)「奏すべき事があッて、法住寺殿へ参る。やがてこそ参らめ」1-112
(「西八条へ召しつけ。さぞう参れ」と言つので、「奏上すべき事があって、法住寺殿へ参るのだ。それからすぐ参ろう。」)

すぐに実行せず、後で実行するとして、実行を先送りするタイプである。この例では、西光が「やがてこそ参らめ」と言つて参上せず、先送りしている。

【条件提示タイプ】
(3) (穢政)「わが顔ぐ」と言ひければ、〜(唱)「仕ッともおねえ候はず。御自言候ば、其後こそ給はり候はめ」1-325
(「私の首を討て」と言われたところ、〜「とてもお首を討つとも思われません。ご自害なさいましたら、その後にはお首を頂戴しましょう。」)

条件を設定し、その条件を満たせば実行するというタイプである。(3)で唱は穢政が自害することを条件に実行を約束している。
【嘘タイプ】
（4）（宗盛）「きこえ候名馬を、み候ばば」と言ひつつはされたりければ、伊豆守の返事には、（仲綱）「さる馬はもって候ひつれども、此ほどありに、乗り損じて候ひつつあるひだ、しばらくいたはらせ候はなて、田舎へつかはして候」。1-293
（「評判の名馬を見たいものです」と言って受れたところ、伊豆守仲綱の返事には、「そういう馬はもっていましたが、近頃あまり乗りすぎ疲れさせてしまいですので、しばらく休養させようというので、田舎へつかわせてあります。」）

全くの嘘話をでっちあげ、それによって断るというタイプである。（4）では、宗盛の依頼に対して、仲綱がウソ話をでっち上げて断る。

【意志表明タイプ】
（5）（今井）「君はあの松原へいらせ給へ。兼平は此敵ふせぎ候はん」と申しければ、（義仲）「所々うたれんよりも、一所でこそ打つをもせむ」2-180
（「殿はあの松原にお入りください。兼平はこの敵を防ぎましょう」と申して、〜「別々の所で討たれるよりも同じ所で討死にしましょう」）

単に意志を直接的に表明するだけのタイプである。（5）は、義仲がただ自分の意志を表明しているだけである。

【他者押しつけタイプ】
（6）前後不覚になりしかば、（親俊）「つかまつとも覚え候はず。他人に仰せ付けられ候へ」とて、刀を捨ててのきにけり。2-475
（前後不覚になったので、「お役が勤まるとも思われます。他の人にご命令くださいますよう」といって、太刀を捨てて退いてしまった。）

仕事を他人に押しつけて、自身は逃れるというタイプである。（6）は、親俊が自分ではできないので、他人に押しつけて断っている。

以上、「断り」のパターンを整理してみた。断り方は現代とはほぼ共通するようである。

3.3 「断り」の談話展開
次に、「断り」の談話展開について考えてみよう。以下では、断った後、どう展開するかに注目してみる。断った後の展開には二つのパターンがある。

断り
(A) → 激怒して再度強く依頼する → (仕方なく) 受諾する

(B) → 説明を受けて考え直し、依頼を撤回する
(A) は、依頼主が再度依頼するというパターンである。再度の依頼では、最初に比べて依頼の仕方がきつつになる。受け手はそれを自力で観察返すことができず、仕方なく受諾することになるのである。再度の依頼を断るという例は資料中には見られなかった。実際には、受諾をめぐって押し問答になることも想定されるが、そのような例は見あたらないのである。一方、(B) は、依頼主が依頼を撤回するパターンである。依頼したものの、受け手の説得・論理によって思い直し、依頼を撤回することになる。

なお、複数回の「断り」は地の文で見られ、「頼りに辞す」のように表現される。具体的なやりとりは、「平家物語」では会話文で描写されていない。したがって、「断り」表現が出てくるのはひとつの依頼に対しては、原則として一度だけということになる。

なお、「断り」の読解展開については、近年ロールプレイ会話調査という方法を用いた方言研究の成果が報告されており、注目される。それらとの比較は今後の課題としておきたい。注1

3.4 「断り」表現に見られる特徴

「断り」において見られる表現上の特徴を挙げておく。

① 定型的な「断り」表現は未発達である。

現代語の「お断りします」「出来ません」「嫌です」のような定型的な断り表現は見られない。

② 理由説明がなされる場合が多い。

理由説明なしに断る例は、清盛、始皇帝など、権力者に限られる。身分の上下に厳しい社会では、上位者からの依頼を何の理由もなしに断ることは許されざる行為であったのであろう。

③ 謝罪表現は見られない。

現代語では、断る場合に、「すみませんが、私には出来ません」のように謝罪表現が伴うことがある。注2

④ 助動詞「む」「べし」「まじ」の使用が目立つ。

「依頼」「断り」には、助動詞「む」「べし」「まじ」が使用される例が目立つ。

4. 対人配慮表現の萌芽

ここまで、「平家物語」の断り表現について観察してきた。以下では、「依頼—断り」場面における前置き表現に注目してみよう。具体的には、「理をまげて」「しかるべく候はば」「いえし」を取り上げる。

現代語では前置き表現が発達しており、多様なものが見られる。注3 人に依頼する場合、「無理を言いますか／できましたら／悪いんですが／して下さい」のように用いられる。以下では、「無理を言いますか／できましたら」「悪いんですが」といった前置き表現の萌芽を資料の中から探ってみよう。

4.1 「理をまげて」

(7) (後覚) 「～ただ理をまげて乗せ給へ。せめは九国の地まで」とくどかれけれども、都の御使、「いかにもかなび候まじ」とて、1-194

(4) — 67 —
（「ただ道理をまげて、乗せてください。せめて九州の地まで」と繰り返し懇願なさったが、都から御使が、「どうしてもそれはできません」といった。)

（8）（郎等）「急程おそろしい天の客の候に、ただ理をまげてとどまらせ給へ」と申しけれども、（助長）「弓矢とる者のそれによるべきやうなし」とて、1-473
（郎等ともは、「これほど恐ろしい天の告げがありますから、ただ道理に反しても（どうしても）
お止めください」と申したが、「武士たる者がそんなことに従うわけにいかない」といった。）

（7）は、仮髪が船に乗せるよう都の使いに懇願する場面、（8）は、郎等が助長に出陣を思いと
どまらせようとする場面である。これらの「理をまげて」は、現代語の「無理を申しますが」
のニュアンスにかなり近いと思われる。

4.2.「しかるべき候はば」

（9）（知時）「～しかるべき候はば、御ゆるされを願りて、ちかづき参り候ひて、今一度見
参にいり、昔物語をも申してなくさめ参らせばやと存じ候。～」2-265
（「できることをしたら、お許しをいただいて、お側近く参りまして、今一度お目にかかり、昔話を
申してお慰め申し上げたいと存じます。～」）
※「知時」＝木工右馬允知時。重衡が長年使っていた侍。

（10）（三郎丸）「～しかるべき候はば、御ゆるされをかうぶって、大臣殿の最後の御車を仕
り候はばや」とお申しつければ、2-401
（「もしそうしてよりしごければ、お許しをこうむって、大臣殿（＝宗盛）の最後の御車のお供をいた
しとうございます」と強いてお願い申したのや。）

（9）は、三郎丸が宗盛の車の供を願い出る場面、（10）は、知時が捕虜となった重衡に面会を申
し出る場面である。これらで用いられる「しかるべき候はば」は、現代語「よろしかったら」
「出来ましたら」のような意味が感じられる。

4.3「望し」

（11）（義経）「いかに宗高、あの扇のまん中を射て、平家に見物させよかや」と。与一見っ
て申されば、「（与一）射はばげはるも、不急に候。射損じ候ひなば、ながきみかた
の御きずににて候べし。一定仕らんずる人には仰せ付けらるやうや候らん」と申す。

判官（＝義経）大いにいかまって、（義経）「鎧倉をたてて西国へおもむかん殿原は、義
経が命をそむくべからず。すこしも子細を存ぜん人は、とう」「はよりかへるべし」
とぞ宣ひける。与一かさねて辞せばあしき想ふにや思い出けん、（与一）「はづれは知
り候はず、御定で候へば、仕てこそ見候べり」2-358
（「どうだ宗高、あの扇のまん中を射て、平家に見物させよれや」。与一が呪って申すには、「う
まく射切ることができるかどうかわかりません、射損ないましたなら、長く味方の弾となりましょう。

—66— (5)
確実に射確されそうな人に仰せつけられるのがようございましょう」と申した。
判官はたいそう怒って、「鎧をたって西国へ出向く連中は、義経の命を背いてはならぬ。少しでも
あれこれ文句を言うと思う者は、ここからさっさと帰られるべきだ」と言われた。与一は重ねて
辞退したらよくなんだろうと思ったのか、「はずれるかどうかわかりませんが、御ことばですから、
잇してみましょう」。

(12) (義仲)「猫殿のまれ／わいたるに物ぞそへ」と宣ひける。中納言を避け(、光
隆)「ただいまあるべもうなし」と宣へば、～中納言召されもさすがあしかるべきば、
答って召すよししり。「2-126
(「猫殿が珍しく来られたのだから食事を用意せよ」と言われた。中納言はこれを聞いて、「今食事
などとんでもない」と言われると、～中納言は召し上がらないのもやはり具合がわるいので、著を
とって召し上がらりをした。)

(11)は、義経が邪鎧と栄一に扇の的を射るよう命じる場面、(12)は、義仲が光隆に食事を勧める
場面である。(11)(2)は、いずれも地の文の例であるが、形容詞「悪し」が用いられている。こ
れらは、現代語「悪いんですけれど～」と通じるところがある。ただし、注意すべきは、(11)(2)
の「悪し」が地の文で用いられていることである。両者は、作者が登場人物に替わってその
心中を述べていると思われる。また、会話文中の定型化した表現とはなっておらず、その準
備段階と言えるのではないだろうか。
以上、前級に表現について見た。(注4

5. 対人配慮と対理配慮
前節の「理をまげて」「悪し」「しかるべき候はば」と、いずれも明確な対人配慮表現とは
言い難いものである。これらに共通しているのは、依頼者にたいする配慮、言い換えれば「人」
に対する配慮だけでなく、ある種の規範に対する配慮のニュアンスが感じられることである。
たとえば、(11)では、大将義経という個人に対して「悪し」と表現したとも言えるが、同時
に大将の命令には必ず従うという規範に反するという意味で「悪し」と表現したとも言える。
(12)は、義仲に対して「悪し」であるように見えるが、同時に客は出された食事を食べるとい
う規範に反することが「悪し」であるとも言えよう。考えてみると、「理をまげて」は規則
を犯すことの申し出であるし、「しかるべき候はば」も規則をゆるめるかかかることの申し出
であった。これらはいずれも、規範意識に反するという共通性を有しているのである。
人がなすべき規範は、「平家物語」では「理」という語で表され、「理は冒頭の「盛者
畏るもの」が象徴するように、「平家物語」に通底する基本的概念と言えてよい。ここで、「理」
に対する配慮を仮に「対理配慮」と呼ぶことにしよう。「平家物語」では、「対理配慮」と「対
人配慮」が未分化であり、むしろ「対理」の色合いが濃いようにも見える。とりわけ、戦に
おいては個人の自由がなく、いわば将棋の駒のように動きが要請されるよう。封建的な社
会構造では規範性に重きが置かれ、個人の存在はさほど大きくない。しかし、近代社会に
おいては、個人の存在が大きいのであり、対人配慮もそれに対応して比重を増していくと考

(6)
えるのが自然であろう。「理」を重んじることは、『平家物語』という軍記作品の特性を反映するものと思われる。注5

6. おわりに

今回の『平家物語』での調査は、中世における配慮表現の一画に光を当てたに過ぎない。中世期の全容を知るには、説話など他の資料の調査結果と突き合わせる必要がある。今後、近世・近代と繋ぐことによって、対人配慮表現の発達過程が浮かび上がらせてみたい。

注
1 日高（2008）は秋田方言についての調査報告であり興味深い。山形（2009）は福井方言で調査を行なっている。
2 近世・近代の実態については青木博史（2008）参照。
3 現代語の前置き表現については、多門（2008）参照。
4 前置き表現の発達は、文構造の変遷と関係づけて説じる必要がある。文構造について言えば、古代語では「事態+モダリティ」で文を構成していた。中世以降、叙法副詞が発達することによって、「モダリティ+事態+モダリティ」という形に変化した。その結果、現代語で、仁田義雄氏が挙げるように、事態モダリティが包み込むという文構造モデルが立てられることになる。前置き表現は、発話主体の「心的態度・気持ち」を表すものであり、広義のモダリティ表現として位置づけられる。現代語について井出（2006）では次のように述べている。「……前置き表現はそれを言うことにより話し手の相手の立場に対する配慮を示しているというモダリティ表現と言えよう。」（56頁）そして、前置き表現を「伝えたい命題内容を言うために、相手の考え方などを気遣っていることを明示的に示す談話レベルのモダリティ表現」（57頁）としている。この捉え方は妥当である。

古代語のモダリティ表現はもっぱら文末で表わされたが、近代語では、「文頭一文末」に分離してきたのである。このような文構造の変化は、対人配慮をより細やかに表現することが動機づけになったと考えられる。文末の領域だけでは、表現形式を詰め込むのに限界がある。

日本語の文構造の変遷については、坂倉（1970）が示唆的である。坂倉氏は日本語の表現スタイルが「開いた表現」から「閉じた表現」へ推移したと捉える。その中で係り結びの衰退、格関係の明示化、連体形終止形の同一化といった形態論的、統語論的な変化を統一的に説明しようとしている。筆者の立場からは、その変化を対人配慮という観点から捉え直すことが可能であるが、この問題については稿を改めることにしたい。

5 「理」を規範性の象徴と考えるならば、「依頼」「断り」表現において、範囲に照らした判断を表す助動詞「べし」「まじ」が頻用されるという事実はひじょうに興味深い。両者が古代で衰退消減することなく、中世以降に生き残っていくことの必然性を示唆するように思われるからである。
参照文献
青木博史（2008）「近代語における「断り」表現」（シンポジウム「日本語コミュニケーションの中の対人配慮」発表資料）
小川栄一（2008）「延慶本平家物語の日本語史的研究」（勉誠出版）
井出祥子（2006）「わきまえの語用論」（大修館書店）
蒲谷 宏（2007）「大人の敬語コミュニケーション」（ちくま新書）
河嶋美里（2009）「依頼」表現の研究——『宇治拾遺物語』を資料として——
平成20年度福井大学教育学研究科修士論文
国立国語研究所編（2006）『言語行動における「配慮」の諸相』（くろしお出版）
阪倉篤義（1970）「「開いた表現」から「閉じた表現」へ 国語史のありかた試論」
（『国語と国文学』47巻10号、「文章と表現」角川書店所収）
高山善行（2008）「中世の配慮表現——依頼——断り」の場合——（シンポジウム「日本語コミュニケーションの中の対人配慮」発表資料）
多門靖容（2008）「定型の前置き表現のダイナミズム」（森雄一他編『ことばのダイナミズム』くろしお出版）
仁田義雄（1993）「現代語の文法・文法論」（『日本語要説』ひつじ書房）
日高水穂（2008）「ロールプレイ会話から見る配慮の談話展開」（シンポジウム「日本語コミュニケーションの中の対人配慮」発表資料）
元木泰雄（2007）『源義経』（吉川弘文館）
山形拓史（2009）『言語行動の研究——ロールプレイ会話調査を用いて——』平成20年度福井大学教育地域科学部卒業論文

【付記】
本書の内容は、2008年8月26日に大阪府立大学で行われたシンポジウム「日本語コミュニケーションの中の対人配慮——古典から現代まで——」での発表を基盤としている。当日は、指定討論者の前田広幸氏、福田嘉一郎氏や乾善彦氏など、多くのの方々から有益なコメントをいただいた。記して感謝申し上げる次第である。本稿は科学研究費基盤研究（B）「日本語の対人配慮表現の多様性」（代表：野田尚史）の研究成果の一部である。